

—編集後記—

土壌の物理性 140 号をお届けします。いかがでしたか？

今回の編集後記は編集委員 2 度目の三枝が担当します。私は現在、北海道江別市の酪農学園に所属していますが、2013 年までは北方領土が見える道総研根釧農業試験場（現 酪農試験場）にいました。はじめての編集委員は 2005～2006 年度で根釧農試にいたときのことでした。

根室・釧路管内の耕地の約 80% は摩周系の火山灰を母材とする黒ボク土で、物理性は良好です。対照的に、酪農学園の本部があるキャンパスの土壌は、物理性の劣悪な台地の土壌です。黒ボク土でしか圃場試験をしたことがなかった私は、雨のたびにぬかり、日照りのたびに固まる重粘土の扱いにくさを日々痛感しております。

ご存知のように、今年の 9 月は台風と地震の「天変地異」で始まりました。4 日四国に上陸した台風 21 号の最大瞬間風速は、全国 100 箇所を観測史上最大の値を観測し、特に西日本での被害が甚大でした。その後、北海道でも 5 日には記録的な暴風となり、本学では倒木が相次ぎ道路が塞がれました。さらに、翌日 6 日未明に北海道胆振東部地震が発生し、土砂崩れ、断水、液状化、道内

全域に及ぶ停電などの大きな災害となりました。道内はもとより、被災された全国の皆様に心よりお見舞い申し上げます。

近年増えてきた甚大な自然災害が起きるたびに、自然の強大さを強く感じます。根釧農試にいたときも 2 年続けて大きな地震に見舞われました。田舎道の方は地面が歪んで傾いた建物や、橋の落ちた道路がなかなか復旧されませんでした。それからは、1 m 以上続く軽石層をもつ土壌断面や、高さ 10 m におよぶ火砕流堆積物をみると、仕事や学術的な興味より先に、「わあ、こんなのがきたんだ…」と、それらが降り積もり、押し寄せるときの災害の大きさをより強く想像するようになりました。豊かで美しい自然の恩恵を受ける一方で、地震、噴火、津波、洪水などの自然災害で何度も家や町を壊され、そのたびに復興していくことが、この国土に住む私たちの宿命だとすれば、せめて若い学生達に黒ボク土の土壌断面や火砕流堆積物の露頭を見せるときには、それが形成されたときの情景を想像しろと言い、災害列島日本で生きる者の覚悟を少しでも実感させたいと思っています。

三枝俊哉（編集委員）

土壌物理学会

事務局構成

会 長	石黒 宗秀	(北海道大学)
副 会 長	竹内 晴信	(北海道立総合研究機構)
事務局長	柏木 淳一	(北海道大学)
編集幹事	塚本 康貴	(北海道立総合研究機構)
会計幹事	倉持 寛太	(北海道大学)
会計監査	志賀 弘行	(ホクレン農業協同組合連合会)
	横濱 充宏	(土木研究所寒地土木研究所)
	澤本 卓治	(酪農学園大学)
	飯山 一平	(宇都宮大学)
	岩田 幸良	(農業・食品産業技術総合研究機構)
	北川 巖	(農業・食品産業技術総合研究機構)
	小林 幹佳	(筑波大学)
	三枝 俊哉	(酪農学園大学)
	清水 真理子	(土木研究所寒地土木研究所)
	鈴木 伸治	(東京農業大学)
	中川 進平	(秋田県農業試験場)
	中野 恵子	(農業・食品産業技術総合研究機構)
	中村 和正	(土木研究所寒地土木研究所)
	丹羽 勝久	((株)ズコーシャ)
	笛木 伸彦	(北海道立総合研究機構)
	渡辺 晋生	(三重大学)

編集委員会

委 員 長
委 員